資料

# 翻刻　塩原静『鳩山薫夫人』

植村和秀

〔解題〕本稿は、塩原静稿『人物三面鏡　鳩山薫夫人』、『ブドウ酒』、『新しい表札』、『古ごよみ』、『清和会三十五年誌　せい和　あとがき』を翻刻したものである。いずれも塩原静と鳩山薫との関係が記述の軸となっており、『鳩山薫夫人』をもって総称とした。

明治三十二年（一八九九年）生まれの塩原静（しおばら・しづか）は、婦人参政権獲得期成同盟で活躍の後、犬養毅夫人千代子を会長に、生涯の盟友となる鳩山薫とともに、政友会所属議員の夫人たちを結集して昭和五年に清和会を創設。以後四十年以上にわたって、保守系の有力な女性たちのネットワークである清和会の常任幹事を務め、鳩山薫会長を支え続けた。没したのは、昭和六十三年（一九八八年）である。その生涯については、今回翻刻した『古ごよみ』、および、『産大法学』第四五巻第一号（二〇一一年六月）所収の「塩原静『犬養木堂先生』・『犬養千代子刀自』」解題を参照されたい。

『人物三面鏡　鳩山薫夫人』、『ブドウ酒』、『新しい表札』の翻刻にあたっては、清書された四百字詰め原稿用紙を原本とし、一部の表記を現代風に修正するとともに、明らかな誤記を訂正した。また、翻刻者による補足部分は〔　〕で表記し、翻刻者による註を付している。雑誌に公表されている可能性は高いと推測するが、発表場所は不明である。『古ごよみ』は、塩原しづか編集・発行『清和会三十五年誌　せい和』、一九六七年、六～十二頁所収、『清和会三十五年誌　せ

い和　あとがき』は、一六四頁所収である。なお、『鳩山薫夫人』の執筆時期は、本文中に夫人八十七才とあることから、昭和五十年頃と推定される。ちなみに、鳩山薫は明治二十一年（一八八八年）に生れ、昭和五十七年（一九八二年）に没している。薫子と改名したが、戸籍上は薫のままであり、鳩山薫の名が一般的である。鳩山家の人々に関しては、鳩山会館のホームページに紹介がある。

本史料の翻刻にご快諾を頂いた夘月阿子様に、重ねて感謝申し上げたい。ただし、翻刻に際しての文責は、すべて翻刻者の植村にある。

# 人物三面鏡

塩原　しづか

## 鳩山薫夫人

昭和五年、清和会の創立以来、苦楽を共にしてきた私にとっては、同志であり、会としては昭和十一年に二代目の会長となられた方です。常任幹事の私に一度任せたら、信頼し思ふように私にやらせる、といった、女性ではちょっとまねのできない、大きいところがおありです。他との協調を保つためには、よく耐え忍ばれる雅量は、円満に発達された理智に依ることでありましょう。

「鳩山夫人は女として冷たい人ではないのか？　家庭的な話は聞いたことがない」などと、云はれますが、それは女にありがちの愚痴も、人の噂もまた、衣類などについて、所謂女らしい話などはなさらないのです。もともと他人のことには干渉なさらない性格のようで、昔から嬉しいことがあっても、ハメをはずして喜ぶとか、また悲しいことがあっ

ても、愚痴をいったり嘆いたりはなさいません。そのため、ややともすれば、強い性格と世間の誤解をうけられると思います。すべて出しゃばることがお嫌いなのです。

「白粉けもなく、それでゐて端麗な美しい御婦人だ。誰とでも気軽に逢って下さるし、腰の低い丁寧な要領のよい応対は、とても好い感じだ。お立派なお方だ」とほめられる方々も多いのです。

お若いときから、華やかな会合に出られる時も、指輪をはめてをられるのを見たことがありません。どんな大きいダイヤの指輪でもお持ちになれる身分ですのに。

薫夫人はコンパクトさえもお持ちになってをられません。たまに油取紙をおすすめしても、「顔に油気なんてないわ」と笑ってをられます。それでいていつも薄化粧してをられるようにお美しいのです。

「安田銀行に行かなければ」と云はれたとき、私は貯金にでもと、のんきに思ったところ「利息払いに」ゆかれることがわかり、政治家の家計の切り盛りが、せいいっぱいで、御自分の身につける着物や、装飾品に心をつかうゆとりが、おありではないのだと思いました。

×　×　×

お若い頃から甘いものが大好きで、とりわけ和菓子が好物でした。昔のことですが、逓信大臣の三土忠造夫人を私邸に訪問しましたとき、応接室で三土夫人をお待ちする間に和菓子と果物が出されました。

「よろしかったら、このお菓子をどうぞ」と云ひますと、薫夫人はニッコリされて、「では私の果物もどうぞ」と御自分の前の果物皿を私の方へよこされました。そこで薫夫人はお菓子を二人分、私は果物を二人分、いそいで戴きました。そして互に皿を元に戻しました。急におかしくなって、笑ひを押えるのに困ったことでした。

その頃、清和会の役員会は首相官邸の犬養夫人のお室でした。虎屋の和菓子の大きいのを薫夫人は、三人分ぐらいは平気で召し上りました。

昭和七年頃でしたか、竹内茂代女史が医学博士の学位を受けられ、東京会館で盛大なお祝いがありました。文部大臣鳩山夫人として、祝辞をのべられました。マイクのない時代、会場が広いせいか、中ほどの席に居た私の身にはさっぱり聞えないのです。

「文相夫人としてこれからも、今日のような御挨拶をなさることが度々あると思います。もっと声の出しかたを練習なさるためにも、謡をおはじめになっては」と、その帰途私は薫夫人に申しました。

さっそく仲よしの拓務大臣秦豊助氏の私邸で、静子夫人と鳩山夫人、私とに、平塚茂子夫人が観世流の謡を御教え下さることになりました。十才から長唄を仕込まれていた私は、謡の節まわしにはなかなかなじめませんでした。それで薫夫人に私だけやめたいと申しますと「あなたが言ひ出した謡でしょう。駄目よやめたりしては」と云はれて、しかたなくお相手をしてゐましたところが「鶴亀」のおけいこになりますと、私はどうしても長唄調になってしまひ、お師匠格の平塚夫人から、「塩原さんは、長唄向きだから、謡はむりですネ。おやめになってもおよろしい」と云はれて私は謡のお相手はやめました。

その後、共立学園の学長となられた鳩山夫人は、学生たちに訓話をなさるときも、またいろいろの会で御挨拶をなさっても、声がよく通ると云はれるのも、謡のおかげと申され、現在では令息威一郎氏と御一緒におけいこをなさってをられます。

「浜っ子は気が荒い」となにかのときに私が申しましたら、「あら、私だって横浜生れよ」と薫夫人が云はれるので、「じゃあ同県人として、改めて」とふざけながら握手したことがありました。ふざけたと云へば、文相夫人の頃でした。

銀座のオリンピックの店へ二人で買物に行ったときに、アイスクリームと野菜のサンドキッチを一皿注文しました。そして食べている中に、胡瓜とトマトが二切残りました。

「どちらでもお取りになって」と私が云ひますと、「ジャンケンしましょうよ」とほほ笑みながら、右手を出されたので、ツイ私も誘ひ込まれて手を出すと「ジャンケン、ポン」とお互の唇がそう動いたのと同時に、二人の手は紙とハサミの形を示してゐました。その二三日後、文相官邸で清和会の夫人たち四、五人の集りの席で私は、「あのとき、大ぜいの人が見ていたらしい中で、ジャンケンをしたのが、急に気まりがわるくなって、私がハサミを出して勝ったことを忘れて、負けた貴女が先へトマトのサンドキッチをお取りになったのを、あとで思い出したら、おかしくって」と云ひますと、「アラ、私が負けたの？　あのとき」と二人で大笑ひするのを、そばの夫人たちがあきれ顔で聞いて笑ってをられました。

×　×　×

敗戦、自由党結成、組閣前夜の追放、闘病、追放解除、政界復帰。

あまりにもドラマチックな九ヶ年にわたる人生の複雑多岐にわたる深刻な苦悩にもよく耐えられた薫夫人の御苦労を、私なりにただ見守り心痛するばかりでした。

昭和二十九年十二月九日、国会に於いて、正式に首班指名をうけられた日、そして鳩山内閣誕生のあの大きな歓喜は、永久に忘れることのない感激でありました。

私にとりましては、鳩山内閣が鳩山首相の御健康のつづくかぎり無事に良き政治をと、念じてをりました。そしてまた忘れることのできないある場面がありました。それは、昭和三十一年十月七日、鳩山首相御夫妻が、訪ソの旅に出発

された夜のことです。総理官邸ではお赤飯をたいて壮行会が催されて、首相御夫妻の御無事を祈りました。そして、首相夫人を中心にして記念写真をとりました。

左記の方々（敬称略）

法務〔大臣夫人〕牧野清子、通産石橋梅子、大蔵一万田誠子、文部清瀬ふさ、労働倉石徳子、郵政村上喜和子、厚生小林麻佐子、建設馬場、運輸吉野、国務大麻世津子、国務太田福子、国務高碕糸子、外務重光令嬢、官房長官根本源子、副長官田中信子、参議院議員紅露みつ子、松永、星島雛子、幹事長岸良子、清和会常任幹事塩原静　以上。

写真もすみ、お別れの御挨拶もすんで夫人たちは玄関の方へゆかれたとき、薫夫人は私のそばへよってソッとささやかれたのです。

「しづかさん、こんどはお骨を抱いて帰ってくるかもしれませんわ」。

私は一瞬、はっとして、背中に戦慄に似たものが走るようでした。私のふるえる視線をうけとめて、薫夫人はそっと目を伏せられました。神々しいまでに悲壮な美しさに輝いていたそのお顔！　死を賭して、政治家としての使命を果たそうとしておられる鳩山首相。それを心得ての上で、病める夫の重い使命に従おうとしておられる薫夫人。そのけなげなお気持に、深く胸をうたれ、晴の門出に感傷の涙なぞ、おみせしては、いけないと必死に涙をこらえたのでした。

訪ソに出発されたその夜の新聞記事を集めて、スクラップブックに貼り、御無事に帰朝になった日までの、ソ連をはじめ各国に於ての報道記事を五種の新聞から切抜いて貼りました。御帰朝後おちつかれた頃に、音羽の邸に持参して差上げましたらば、たいそうなお喜びようでした。御出発の時の日本の新聞は見ることなく、あわただしい中にも、首相の御健康にたへづお心をくばられてをられたその御苦労が、報われての御無事のお帰朝とて、私の心を込めての切抜帖を、感謝して下さいました。

昭和三十一年十一月十三日（火）
祝・日ソ交渉妥結、鳩山会長帰朝歓迎会
浅草柳橋柳光亭（会員古立良子宅）
会費一五〇〇円（中食代、但し税飲物心付等は本会より補助）当日持参のこと。

晩秋の空晴々として、日ソ交渉のため長途の旅を無事に御帰国になりました鳩山会長もお旅疲れの多い中ではありますが、首相夫人としてのこの度の御苦労を心から感謝し、御慰労も申上げたく、またソ連に対する御感想もうかがいたく存じます。

清　和　会

出席者百四十六名が、柳光亭の大広間他六室に分かれて祝宴。会長をかこみ各室で記念写真をとりました。(1)

×　×　×

政・財界のおえら方からは、賢夫人として敬愛される薫夫人ですが、御家庭ではまことに平凡な妻であり、母になりきってをられました。とくに一郎先生にはなんと云はれても、ハイ、ハイと申されて一度も口答えなどはなさいませんでした。「なんて旧式なご家庭だろう」、そんな感じをうけることもありましたが、典型的な夫唱婦随のご家庭でした。

昭和三十四年三月七日、鳩山一郎先生は急逝なさいました。

未亡人となられた薫夫人は、それ以後は、長い間の政治家の妻としての重責から解放されたお気持のゆとりか、「その着物、好い柄ですこと」などと申される、女らしさもおありでした。

昭和四十一年四月、春の叙勲に共立女子学園長鳩山薫女史は「勲一等瑞宝章をうけられました。」日本の民間の女性で、勲一等瑞宝章をうけられた方は、薫夫人がはじめてであります。

昭和四十一年六月二十二日（水）、港区芝三田綱町、三井クラブに於きまして、清和会創立三十五周年と、鳩山会長の叙勲並びに喜寿の記念祝賀会を、盛大に挙行いたしました。出席者百八十余名で列席の中には、岸、池田、佐藤の歴代首相夫人。松永、益谷、林、大野、清瀬の歴代の衆議院議長夫人、衆参議員諸姉、創立以来の諸会員等、現代日本の超一流夫人ばかりが、きらびやかに列び、石橋元首相夫人梅子様よりの祝辞は、三木武夫夫人睦子幹事が代読されました。その他たくさんの方々の祝ひの言葉に答えられて、福よかな温顔、若やいだお声で、鳩山会長は御挨拶なさいました。

佐藤首相夫人寛子様の音頭で乾盃、そして「三十年前から、鳩山夫人のお人柄をお慕ひ申し上げており、はからずも政界の大先輩として、身近かにお目にかかれるようになって、清潔で優雅で理知的なお方様で、ますますご尊敬申し上げております」云々」。

休憩後、砂田重民氏令嬢（花柳かより）の地唄舞「けしの花」は金屏風に映えて、その端麗優雅な高髷に黒地振袖の裾を引く舞姿にうっとりと見とれました。緋毛氈に荻江節のぢかた四人が坐り、市川新之助丈（現市川海老蔵丈）は黒紋付に、青と黒の細縞の袴姿で、「八島」を踊られました。その舞扇は前田青邨画伯筆の波と月の故団十郎丈遺愛のものでありました。まだ大学生の新之助丈ですが、さすが市川宗家をつぐだけに、しっかりした素質の良さを思はせ、その明眸のくばりに、父君を偲ばせて出席者の中には、海老さまファンも多く満足されたと思います。

× × ×

昭和四十八年十二月四日（火）

ホテル・オータニに於て午後二時より、「鳩山威一郎氏をはげます会」が開催されました。村上勇夫人の車で早めに行きました私は、折りよく鳩山刀自とゆっくりお話もでき、写真班の青年に、二人だけで写してもらいました。二人だけの写真は、四十一年の叙勲祝賀会以来のことでした。鳩山首相夫人として訪ソ出発の折りに、お召しになってをられたお召細縞の訪問着を、後日訪ソの記念として私は戴きました。その思い出多い着物を、威一郎様のお目出度い門出の心祝ひのつもりで、特に着てゆきました。そのことを申上げると、鳩山刀自は十八年の昔のこととて、びっくりなさりながらなつかしそうに御らんになりました。

北海道から九州にいたるまで全国より参集された方々は、千七百余人でありました。御母堂としてお嬉しそうに人々にそれぞれご挨拶におせはしくしてをられましたが、そのうち壇上の椅子にかけられて、盛大な会の進行を見守られてをられました。

私たちはおしゃべりしながら、勝手に御馳走のあれこれを次ぎ次ぎとお皿に取ってはいただきましたが、鳩山刀自には、ずっと壇上にをられるだけで、飲物も何も召し上がれないのが、どうにも気になって根本竜太郎夫人と気をもむばかりでおちつけませんでした。

昭和四十九年七月の参議院選挙で、全国区より美事第四位で鳩山威一郎は当選されまして、御母堂としてのお喜びいかばかりかと拝察いたしました。(2)

薫刀自も八十才頃よりは、結婚式その他お目出度い席には近親の他は、御辞退なさいます。「お祝いの席で、もし体の工合が悪くなって、そそうがあってはいけないから」と御遠慮されがちのようです。けれども、お通夜や告別式には、つとめて出席なさるように気を使ってをられます。人の悲しみにはいっそうのあたたかいお心を通はせられます。

八十七才の学長の重責を淡々としてはたされてをられます。
長くきびしい人生の風雪に耐えられ、みづからの努力と修養によって、切り開かれた尊い境地におられる薫刀自の御長寿を祈念いたします。

## ブドウ酒

（1）

「これネ、このあいだ久米正雄さんがいらした時に開けて出したら、とても素敵だってほめていらしたし、九日会の時も皆さんが、めずらしく良いブドウ酒と云はれたりしたので、貴女もお好きだから一杯いかが？　もうこれきりなんですけど」

秋の陽ざしが西窓の花鳥模様のステンドグラスから、洋室の書斎に射してゐた。

向い合って腰かけてゐた私は、鳩山夫人が（その時は昭和七年で文部大臣）大きなカップに、なみなみとついで下さった琥珀色の白ブドウ酒の高い香りを深く吸い込んだ。ソッと唇をつけて小口に飲んだ。まあ素敵!!と叫んだ私を見る薫夫人の眼はほほ笑んでゐた。

「久米さんがほめなくても、素晴らしくおいしい白ブドウ酒ですわ」

「貴女らしいほめ方ネ。ほんとうにおいしいでしょう。九日会の次の日に、九日会のメンバーの岩本さん（その当時司法参与官）がいらしたの。主人は役所に行って留守なんで、私がお目にかかったら、その御用といふのがネ、奥さん真にすまんが、昨日のブドウ酒をもう一杯飲ませて下さらんかと、真面目なんで大笑ひしましたわ。岩本さん一杯だけ

でも、とても喜んですぐ自動車でお帰りになったのでよほどお気に入ったようネ。このブドウ酒と同じ一九一九年のがあれば、岩本さんに差上げてもよかったんですがネ、もうこの瓶だけでしょう。それに久米さんが、こんな良い白ブドウ酒は、日本ではめったに手に入りませんからネ大事になさい、なんで云ふでしょう。それをまた主人が、そのとおり九日会でお話して、皆さんに一杯きり上げたのです。だから岩本さんはお役所の途中から飛び込んでいらしたのよ」。

「私だって、飲まして下されば、この坂道でも毎日通いますわ」。

冗談を云ひながらも、私は息をつめて一口づつ舌にとけ込むその味が、深くふかく心に浸みとおるようであった。アルコール気なんてものはまるで感じられなかった。自然の年月に調和された本場の白ブドウ酒。日本ではめったに飲めないであらうといふ、久米さんの言葉はたしかに本当だ。白ブドウ酒とはこんなにもおいしいものか！

一九一九年の白ブドウ酒を飲むと、今まで自分が飲んでいた白ブドウ酒は、ありゃなんだ、といふ気持ちになった。

薫夫人は甘味が大好物で、いつか首相官邸の犬養夫人の室で、大きな和菓子三ツもいちどに食べられてからは、鳩山夫人の甘党が評判になった。甘党だとばかり思ってゐた鳩山夫人が、本物のブドウ酒の味もわかるお人とは、うれしいと思った。

私は甘味があまり好かないで、ブドウ酒は赤・白いずれでも好きだと云ったことを、よく覚えてゐて下さって、私が少しつかれた顔をしてゐると、「ブドウ酒をあげましょうか」などと云はれて、薫夫人も一緒に飲まれることもあった。

一九一九年の白ブドウ酒の一杯にひどく魅せられてしまった私に、薫夫人はその日の帰りがけに、一九二三年の白ブドウ酒を一本下さった。そのブドウ酒もなかなかよい味であった。ブドウ酒を好まなかった母が、一度少し飲まれてからは、時々欲しがられた。

（2）

昔、私の家は和洋酒問屋をしてゐた。日露戦争の明治二十七・八年頃には、北海道の函館港で盛んに商売をしてゐた。そして父は、道会議員や区会議員にもなり成功者であった。また日本赤十字社の終身会員にもなってゐた。函館の和洋酒問屋をやめて、東京へ引き上げてきた頃が、明治四十二年頃かと思ふ。

和洋酒問屋をしてゐた頃に、フランスから樽で取りよせた赤ブドウ酒を、店をやめた時に、ビール瓶十五本に詰めて大切に東京まで持ってきた。「このブドウ酒は、とても古いフランスものだから大切に飲むのだ」と云ひながら父はチビチビ飲んでゐた。十五本の赤ブドウ酒もあと一・二本になったのは大正六年頃であった。

横浜の尾上町に店が、麻真田の工場は戸部にあって、住居が本牧の頃には、私が腺病質のためか手足がいつも冷へ切ってゐた。(3)

父は私の冷たく青白い手を気にして、大切にしてゐるフランス製の函館以来の赤ブドウ酒を薬用として飲ませてくれたが、「なんて渋くてまずいものだろう」と、ありがた迷惑に思った。白砂糖を入れて熱い湯をさして飲むなどといふ、気のきいた事を知らない十七才頃であった。

父が自慢のフランスから樽詰でとりよせたといふ赤ブドウ酒は、今にして思ふと、神戸か横浜あたりの輸入商から買い入れた樽詰で、ただ中身のブドウ酒が、場ちがいのブドウ酒とうまく調合されたものではないかと思ふ。それとも、なまじビール瓶などに詰め直して、貯蔵法が悪くて中身が変質したのを、ただ古いフランスのブドウ酒と思い込んでいたのだ。あんな渋味のある、まずい赤ブドウ酒には、その後お目にかからない。

（3）

婦選運動に熱中してゐた頃、何のニュースであったか、ともかく議会運動に関する緊急のニュースを謄写版にして、吉田信子書記と若い事務員をつれて、十社ほどを自動車でまはりながら、政治部か又は社会部の記者に面会して「そのニュース」を説明しなければならなかった。

親切にいろいろと議会運動の成行を聞いたり、筆記したりした記者もあれば、「参政権」ですかと、冷笑で向へる若い記者もあった。順序よく道をまはって茅場町の角の中外商業新報社に行って出てきた時には、「こんなにつかれるのなら、薬瓶のブドウ酒を、自動車の内で飲めばよかった」と独り言を云ったのを、連れの若い人たちに聞かれてしまい、「塩原委員長と薬瓶のブドウ酒」としばらくは、事務所の噂になった。

その頃の私は、年代を云々するような上等のブドウ酒は飲んでいなかった。父が横浜の保土ヶ谷にある「カタビラブドウ園」の赤ブドウ酒をいつも、東京の私宅へさげてきて下さった。

議会運動と委員会などで、かなり気持の疲れる日が多かったから、寝るときには、いつもコップ一杯の生ブドウ酒を飲んでよく眠った。女の人は疲れると、まづ甘味といふが、私は疲れると「まずブドウ酒」といふことを、すっかり婦選の仲間に知られてしまった。

私がつかれて議会から、婦選の事務所に引き上げてくると、「塩原さんブドウ酒がなくてお気の毒さま」などと冷かされた。

飲めるロの金子しげり女史や坂本眞琴女史などと、議会の帰りにすきや橋の富可川に行ったときには、日本酒を飲んだ。市川房枝女史はすぐに赤い顔になるが、しげり女史と私はなかなか顔に出ない方で、かなり強いらしかったが酔ふほど飲んだことはなかった。

カタビラ製の生ブドウ酒にあまんじて、それをうまいと思って盛んに飲んでゐた頃の私の情熱は、猪突猛進、婦選運動をまくしたててゐた。三千万女性の解放は私の双肩にありなどと。けれども徐々に、ブドウ酒に対する味覚が変ると共に、私の生活にも、情熱にも大きな変化がきてゐた。

（4）

食卓で私の前に坐ってをられた犬養木堂先生は、「塩原さんにもコップを出して上げなさい」と、女中さんに命じられた。私は柄にもなくモジモジとしてゐたのを思い出す。

昭和六年の二月頃であったと思ふ。

犬養夫人を会長にした清和会を創立して間もない頃で、私は常任幹事として、毎日のように四谷南町の犬養邸の奥に行ってゐたので木堂御夫妻と共に食卓をかこむ日が多かった。

木堂先生がブドウ酒を召し上るのを見ることはあまりなかった。千代子夫人はいつも白ブドウ酒をコップ一杯、食前のくすりのように飲み乾してから、御飯茶碗を出されるのが常であった。

私がブドウ酒を飲むかどうかといふ事は、千代子夫人はまるで眼中になく、一度も塩原さんはどう?とは言はれなかった。

木堂先生が気を利かせて、女中さんに命じたコップにブドウ酒を、半分ぐらいついでもらって飲んだのを覚えてゐる。たいそうおいしいブドウ酒と思った。その年代を聞くのは生意気らしいと、やめにした。その時きり私は犬養邸では、ブドウ酒を飲んだことはない。

昭和六年十二月、木堂先生が総理大臣になられた時は、紅白のリボンをつけた半ダース入の篭につめられたブドウ酒

が、沢山に祝品として運び込まれた。他に高価な祝品はかなり多かったが、ブドウ酒の祝品だけは羨ましかった。沢山のブドウ酒が、地下室に貯蔵されるのを見たときは、二・三本は欲しいと思った。ブドウ酒半ダース五十円だと、明治屋で調べてきた玄関子が、夫人に報告するのを脇で聞いた。その後、首相官邸の食卓でも千代子夫人は、食前一杯のブドウ酒を飲んでをられた。

木堂先生の急死以後、未亡人となられた千代子夫人は相変らずブドウ酒をのまれた。

熱海の別荘に、泊りがけで一週間ほど行ってゐた時、私は「ブドウ酒は大好きです」と言おうかと思ったが、薬瓶に入れてわづかばかり東京から持参されたらしいのを見たら遠慮してしまった。

麻布の未亡人宅で御一緒に食事する時も多いが、いつも御自分だけ飲んでをられるのだ。

## 新しい表札

きびしい暑さがずっとつづいてゐる。自由党婦人部の役員会に出席してゐる私に、本部事務室の小池さんが三時のニュースで解除が発表されたらすぐに知らせにきてくれることになってゐた。副部長の近藤鶴代代議士を中心に協議をしてゐてもとかく腕時計が気になった。月報の校正に印刷屋から戻ってきた高橋部員が、電車の中で夕刊に発表されたやうですと言ふ。今まで何度もおあづけにされているので本当には思へず会議をつづけていたがそれも四時十分にすんだので、本部の事務室にゆくと、夕刊に出た以上は本当でせうといふ小池さんを誘って、平河町の電車道に面した西日の強くあたる本部の玄関に立って車をさがした。

「あら、表札が新しくなって……」と私は御影石の門柱にはめ込まれている、鳩山一郎の真新しい表札を見上げて、

小池さんとふくざつな微笑を浮かべた。

円タクが登ることをきらふくらひに高くそしてカーブしている坂道のその広やかな土手にこのごろやっと若木がまばらに植へられてゐた。その坂道を登りかけると、後方から自動車が徐行してきて内から戸が開けられた。松岡松平氏が肥った体を片隅によせて、「早くお乗りなさい」と言ふ。「すみません」と二人は乗せてもらった。「僕は車の中で四時十分の臨時ニュースを聞いたので」と言はれた。登り切って玄関につけるとすでに十台あまりが向ふに置かれてあった。庭先から芝生に入ると大天幕が張られて、ニュース班や各社のカメラ陣にかこまれてゐる薫子夫人を見出して私はかけよった。胸がいっぱいで言葉にならなかった。眼と眼が微笑しただけである。

白布の卓の薫子夫人の向ふ側には、三木武吉安藤正純大久保留次郎大野伴睦世耕の諸氏のお顔が一度にズラリと私の眼に映った。

「乾杯乾杯」とビールのコップが高々と上げられて、安藤氏が大きな声で「鳩山一郎君萬歳」と叫ぶ。六百坪の庭いっぱいに響き渡る萬歳三唱は晴れ渡る夏空にひろがって行った。

「離れの室まで聞へたかな」と大久保氏が言はれると「誰か離れへ聞きに行ったら」と薫子夫人も言はれた。(4)

「風の具合で離れまでは聞へなかったさうです」といふことで私はひどく失望した。

「聞へなくてもいい。なるべく刺戟しない方がいい」と大野氏は私の顔を見つつ、うなずくやうに言はれた。芝生では四五人のお孫さん達が若いお母様達を相手に遊んでをられた。故秀夫博士の千代子未亡人や義弟の寺田氏その他がビールを人々にもてなされてゐた。

カメラ陣は薫子夫人が大野氏にビールをつぐところを写したいと注文する。

「奥さんの酌は下手だなあ」と大野氏は日本晴れのエビス顔で言はれる。

「学校の先生はお酌は下手ですネ」と薫子夫人は共立女子大学学長らしい微笑をされた。リンゴと南京豆をつまみながら私も薫子夫人と列んでビールのコップをあげた。「これで肩が軽くなった」と安藤氏がシミジミと言はれると両側の三木大久保両氏も深くうなずかれた。鳩山先生の晴れ姿が祝宴に見られぬだけに、喜びの中にも何かしんみりとした感じであった。

晴れやかに夏空たかく音羽山

私は下手ながらもこんな句が浮んだ。広い庭園には夕風が渡り木陰のカンナが赤くあざやかであった。

村上勇代議士の車に同乗して音羽山を下りかけると、登ってきた車の中の星島二郎氏が「お目出度う」と高く手を上げられた。

「僕たち三年生からは一人も大臣になってをらない」と村上氏は言はれた。日比谷公会堂で自由党結成大会の席上に於ける鳩山総裁の勇姿、追放になるとも知らぬあの前日の組閣風景等々が、夏夜の走馬燈のやうに私には思ひ出されてくる。

飯倉の自宅へ送ってもらって玄関を入ると七時のニュースがはじまった。録音に依る鳩山先生のお声が聞へてきた。でも気のせいかまだ少し言葉がゆるやかであるが、はっきりと信念を力強く言はれる。先生の容態を重く感じてゐた人々には安心してもらへる程度だと思った。

幽谷薫蘭空抱香持年々節待鳳凰

この色紙は鳩山先生が文部大臣の昔、特に私にと書いて下さったのであるが、今となってはむしろ鳩山先生の追放中

の御胸中ではないだらうかと思ひ、この色紙をかけて解除の日を祈ってゐたのである。

解除の日　二十六年八月六日夜

（筆者は自由党婦人部顧問）

## 古ごよみ

### （1）

私は横浜で生れて、函館は地蔵町で育ちました。新開地であるその頃の函館は好景気時代で、私の家は和洋酒缶詰問屋で店の者も大勢いました。店の広い板敷で、私は物差を肩にして「テンツルテンツルテン」と、まはらぬ舌で調子をとりながら、おカッパ頭をふりたてて「猿廻し」を踊っていたさうで、四歳から西川流の踊を習いまた好きでした。六歳の時に芝居小屋に開かれた温習会では、金太郎と汐汲を、とても巧者に踊って両親を喜ばしたそうです。その時の踊衣装は東京まで父がわざわざ買いに出掛けたそうで、汐汲の踊りでは引抜きのところで、緋縮緬の総鹿子絞りの長襦袢に小さな鈴を沢山縫ひつけたので、その鈴音が可愛くひびいたということです。虫干の度にその当時の台付けの波や貝形など、まだ緋色もさめない総鹿子絞りの布や、羽二重の小さな足袋などが出てきますと、母はなつかしそうにして昔話をくりかえしました。

父は政治道楽にかなりな冗費をしたようで、商家でありながら、政友会函館支部の看板をかけて、代議士選挙が始まると、内山氏を後援して、西園寺公の額が掛けてある、五十畳敷ほどの店の二階が政友派の演説会場になります。政友会本部からは、元田肇氏大岡育造氏その他の幹部が東京から応援に私の家に出張されます。ことに義太夫の好きな大岡

氏に父はよく聞かされもし、写真なども一緒に写したりして諸氏ともお親しくなりました。商売は休業状態で、人の出入が激しくなって朝から料理屋の御膳篭が入り、店先には人力車がいつも二十台ぐらいは列んでゐました。

そんなことで小さい時から、選挙だ、演説だと、いう事を見聞させられていました。父が大切にしていた自慢の西園寺公の大きな額は、函館の大火に惜しくも焼失しました。

一人っ子の腺病質の私は、大切にされすぎて抵抗力のない、いつも咽喉ばかり悪くして首に絹半巾を巻き通しているような弱い子でした。けれどもお稽古ごと（踊りお琴長唄）にも学校にもよく精を出した几帖面な小学生でした。鈴蘭の野、リンゴ林や湯の川温泉、臥牛山に巴港など美しい夢として、函館にはいつまでもかぎりない愛着を持っています。

娘時代は横浜に居り、大正十二年の大震災までは貿易商でした。その頃の私はやせていて神経質な、山手にある女学校の窓から港を眺めては、感傷的になるような娘でした。横浜時代は三度も入院騒ぎをするような弱虫のくせに、気持ばかり強くて女子大に入学させてくれないというのが原因で、転地するほどの神経衰弱になったりして、ずいぶん両親に心配かけました。体の弱いのは哲学書ばかり読むからだと、私の不在中にその本を全部売られてしまい泣いたものでした。生来の好学心はやまず、鹿子木員信博士の指導下にあるカント哲学研究のイリス会に入って勉強したり、その頃唯一の女ばかりの同人雑誌「たかね」に短篇小説を書いたりしていた文学娘で、吉屋信子女史や森田たま女史はその頃の先輩でありました。文学ばかりでなくその頃の娘らしく活花は池坊を岡田広山先生の品川のお宅まで横浜から五年余り通い、茶道は気持に合ってとても好きでしたから六年ほど修業して裏千家家元、円能斎宗匠より宗珠の名を許されました。形式よりもその精神をみっちり仕込まれたことは、所謂肚を作るといいますか、今になってありがたかったと思います。花に茶にその稽古通いも母の好みで、娘らしく高島田や桃色や緋鹿子をかけた結綿、おしどり髷などに結い、衣装道楽の両親のおかげでいつも綺麗に着飾らせてもらいました。結綿髪の娘が哲学を云々するなど変に思うでしょう

が、その頃はちっとも不自然ではありませんでした。

十何年かぶりで吉屋信子女史に逢った時「綺麗な友禅縮緬の長い袂の貴女が、婦人参政権運動の闘士とは、大した転向ぶりね」と冷やかされたものです。私の娘時代は、物質的に恵まれすぎた生活の中にあって、ロシヤ文学や河上博士の第二貧乏物語などの影響からか、贅沢な生活に満足しきれない、何かを求める気持にかりたてられていたと思います。

（2）

私が赤いテガラの丸髷に結ったと申しても、本当にされないでしょうけれども、太神宮の神前挙式から震災までは築地河岸にあった精養軒で披露した結婚生活も、相互の家庭や性格の相違その他の事情から二年あまりで解消の幕をさげてしまいました。温室育ちの私が、それによって世の中というものがわかりかけると、社会的にも法律的にも無能力者としての女の地位について大きな疑問を持ちました。

その頃（大正十三年十二月十三日）当代知名の各女史総動員で婦人参政権獲得期成同盟会（後に婦選獲得同盟と改名）という有力な会が発会され、私も入会して市川房枝氏山高しげり氏等々と共に運動に打ち込みました。大正十五年には議会運動部の委員長という重責を荷い、それから満五ヶ年間は、参政権運動のために、開会中の衆議院の面会室に傍聴席に三ヶ月間は、雪の日も風の日も私は通いました。「労働者と女性の解放は一つである、日本女性三千万のために闘う」という強い信念に燃えていたからです。政友会や民政党にはその頃の委員長としての私の働きを記憶して下さる代議士の方々もありました。そんなわけで田中義一内閣の時代から、水野錬太郎夫人や鳩山一郎婦人には委員長として特に親交を得て、婦選運動のためには水野夫人の陰の援助は大きな力でした。

昭和四年の秋、湯河原の天野屋に御滞在中の犬養総裁を訪問して、二時間余も婦人公民権に対する婦人の要望と婦人界一般の現状を申上げた結果は、犬養総裁の力強い御助言と政務調査会長山崎達之輔氏の御尽力に依り、政友会は民政党に先んじて立派に党議として婦人公民権を可決して、婦人に公約したわけです。もっとも四年の春には大多数の賛成を得て通過しようとした婦人公民権案も、望月内相の時期尚早という事で握り潰しにされました。五年の春には衆議院を通過し不完全ながらも、次回には政府案として提案されるという事になったので、私の五ヶ年間の奉仕にも一区切りを感じて、闘士として第一線から退き、明大女子部法科に通学する事になりました。

「婦人の地位向上、婦人の政治的進出に深い理解を持たれる犬養総裁の下に夫人達が結束して、大いに今後の婦人の向上進歩の為にも女の立場から働きかけるべきであり、御主人達がせっかく婦人問題に理解があるのに、その陰にある夫人達が女の重要問題に無関心である事は、真の政治家の夫人ではありません。結束する為には会を創立して、それに依りお互に社会の事を広く見聞し学ぶべきでありましょう」と水野鳩山両夫人に進言したところ、鳩山夫人は早くからその必要を痛感されてをられ、水野夫人もまた大賛成で、

「困難な仕事ではあるが、貴女がやり遂げる熱意があるのならば真に結構な事である。尊敬する犬養総裁の令夫人に会長を願って会を創立するがよかろう。犬養総裁とは面識のある貴女であるが、改めて私が犬養令夫人に御紹介するから御賛成を得るように」

という事になり、鳩山夫人と具体案を研究した上で、五年十二月九日の夕、招電によって犬養邸に参上、奥の日本間で「私は犬養の家内で」と申されたお声なり御丁寧な御挨拶が今だに思い出されます。そのときは五時間ほど犬養健夫人（仲子）と三人で具体案につき意見の交換がありました。十二月十二日には、星ヶ丘茶寮に犬養令夫人が前閣僚夫人達（中橋、山本、水野、三土、床次、久原、原、勝田、川村）を御招待になり午餐会を開かれた席上、私を御紹介下さ

れた鳩山夫人は私の介添役をして下さいました。明大女子部に通学しながら、水野鳩山の両夫人の御紹介によって各夫人を訪問するなど多忙さの中に、準備会を日本橋三越六階の別室で開いて私より具体的なお話を致しました。その時の出席者は鳩山、松野、安藤、若宮、砂田、岡田、牧野、星島、犬養仲子の諸夫人でした。鳩山夫人と二人で会場を定めに歩いたり、毎日のように犬養邸に打合せに通ったりの多忙な日がつづき、昭和五年十二月二十日無事盛大に清和会が誕生されました。私は尊敬する犬養総裁の令夫人を会長と仰いでゆくことの幸いを思い、どんな困難にも打ち勝って立派にこの仕事を残さねばならぬと、深く決意しました。

（3）

昭和七年五月十五日（日）の午後五時半頃首相官邸日本間に於て犬養毅首相は、陸海軍将校の理不尽なピストルのために重傷を負われ、着衣のままの病床でお口から流れ出る血を紙で取る看護の人々、枕辺をかこむ名医の方々、苦痛のお声は一度も出されず時たま、「水」とかすかに申されるだけ。御臨終に集る鳩山文相をはじめ陸海相や各閣僚が枕頭に列ばれた劇的な場面を、砂田清子様と私は病床の裾に坐ったまま涙の眼で見つめました。十五日夜十一時二十六分御逝去！

十六日の御納棺式十七、十八日のお通夜等には常任幹事（鳩山、塩原、砂田、植原、田子）と各幹事二十五名その他会員三十名が参列しました。十九日の首相官邸大ホールに於て政友会の盛大な党葬、常任幹事他五名が参列、五時からの火葬儀にお供申し上げました。

台光院殿沈毅木堂大居士の百日忌の法要は八月二十二日青山墓所の埋骨式に多数参列、本会よりは御影石の名刺受一個（裏に清和婦人会と彫り）御墓所に供えました。

「政友会総裁夫人をもって会長とす」という会則を改正して、名誉会長、副会長制を新設するにつき、犬養会長の命をうけて私は八名の顧問を自邸にそれぞれ訪問して賛成を得ました。そこで七年九月二十八日大阪ビル梅の間に於て準総会を開き、顧問五名常任幹事正会員等三十名出席して、犬養会長を名誉会長に、鳩山常任幹事を副会長に決定して準総会は無事に済みました。十一年には鳩山夫人は会長になられました。

（4）

創立当時の多忙さそれに犬養首相の御急逝に会則改正等々で、とかく学校も休みがちでしたがそれでもどうやら八年三月には明大女子部法科を卒業しました。本会より卒業祝として三越の商品切手金五十円をいただき、それで本箱と別誂の机を記念に作らせました。戦時中疎開しておき無事に現在でもその本箱も机も愛用しております。

昭和十四年七月人事調停法の施行にあたり司法省は初の婦人調停委員を任命、東京では二十五名の婦人の中で法科出身は私一人であり、鳩山会長の了解も得て就任しました。二十三年の家庭裁判所の発足と共に家事調停委員となり現在まで満二十七年間を調停の実務に奉仕しております。

昭和二十年十一月鳩山一郎先生が自由党を結成されましたので私も参加し、婦人部幹事長の肩書で二十一年の総選挙の応援にはモンペ姿で各地をとびまわりました。鳩山先生が追放になられた時あまりの無情さに婦人部をやめようとしましたら「再起して党に戻る時もあるから」と鳩山夫人に云われ思いとどまりました。追放解除、民主党結成に参加、保守合同、鳩山内閣と党の婦人部には協力してきましたが、鳩山先生が総裁をやめられてからは不愉快な事が多く三十三年八月かぎり自民党婦人局を出ましたので、私は保守系無所属であります。

父朝治は三十一年三月十一日九十才の天寿を得て永眠、その告別式には風邪ぎみであられたのに一時間余も友人代表

として鳩山首相令夫人が参列して下さったことは、政治の好きな亡父にとって、百巻のお経文にまさる供養であり、娘として何よりの孝養であったことは忘れ得ぬ感謝であります。

表　　彰

貴殿は永年にわたり各種調停委員に選任され熱減よく幾多の調停事件の解決に努め優秀な事績を挙げ裁判所に貢献したその貢績まことに顕著である　　よって記念品を贈り表彰する

昭和三十六年十月一日　　最高裁判所長官　横田喜三郎　印

歌舞伎座を会場として調停制度四十周年記念大会にあたり第一回の表彰をうけ記念品の銀盃受与の代表者（全国五十名）となりました。十一月一日皇居において両陛下お催しの園遊会にお招きをうけ出席いたしました。

褒　章　の　記

早くから調停委員又は参与員に選任されて幾多事件の処理に当たり適正妥当な解決に努めよくその職責を尽くしたまことに公同の事務に勤勉し労効顕著である　　よって褒章条例により藍綬褒章を賜わってその善行を表彰せられた

昭和三十七年十月一日　　内閣総理大臣　池田勇人　印

永年にわたり清和会員としての母よね、例会にいつも出席して晩年は白髪が目立つ母は皆様にいたわって頂き幸せな一生を、三十八年五月十八日の米寿に永眠、その通知状に友人代表として鳩山薫様のお名をいただき五七日忌の法要にも出て下さいました。亡母の存生中に銀盃、藍綬褒章と二年につづく表彰を受けて喜んでもらい親孝行ができました。長寿の両親を見送って一人娘の大役もすみ、清和会と共にわが半生を無事にすごしてこられたのも、鳩山会長はじめ善意の方々のおかげとありがたく思います。

【付記】（1）と（2）は昭和十二年度会報第六号より再録（3）は本会創立に御協力下さった犬養先生の事や会務としての大事など（4）は私事ですが「私という者」を御理解いただくために書きました。

（四十一年十二月十八日記）

## 『清和会三十五年誌　せい和　あとがき』

創立以来三十五周年!?

昭和三十年六月一日東京グランドホテルで、創立二十五周年の祝賀会をいたし、三十六年一月二十六日帝国ホテル演芸場に於て、三十周年の祝賀会（余興等）引きつづき孔雀間でパーティーを致しました。

そして四十一年六月二十二日には、鳩山会長喜寿と叙勲並びに三十五周年祝賀会を、三井クラブ（三田綱町）で盛大に開催いたしました。これらを記念して三十五周年誌を編集することになりました。

×　×　×

三十年六月「清和会二十五年誌」は皆様に配布済にて、創立以来の例会その他の記録はお読み下さいましたのに、またこの三十五年誌に再録いたしましたのは、十年もたちますと会員の異動もあり、三十五年にわたる本会の歩みをこの小誌にまとめてをきたく。

戦前は毎年発行した会報も十九年で廃止、その十二冊を再読しますと、再録したいよき思い出のものばかりですが、それもできませんので目録に（七八頁）致しました。

戦前は六百余名の会員で、各区の部会も盛んでありその部会の写真三十一枚は、二十五年誌に若き日のお姿をのせてありますが、この度は残念ながら割愛いたしました。

現在の会員は二百六十五名（正会員……元、現代議士夫人百二十名、一般会員百四十五名）本会は宣伝もせず会員もふやさないのであります。創立当時は政友会所属の貴衆両院議員夫人たちの親睦と修養を目的として結束しながら、政治活動はしない特異な会であります。

牧野清子様（創立以来の正会員）は、「飽きもしないし、パッともしない、御飯みたいな味の会」だと申されます。

永い間には、政界の離合集散があっても、代議士夫人たちは御主人とは別で、本会には何らの影響はありませんでした。

とかく女の集りは人の噂や陰口などで、もめるものですが、本会は永い間にもそんなことはありませんでした。

流水の如く、過ぎ去ったことにこだわることの嫌いな私ですが、永い間いつの時でも例会の文面は心を込めて書きました。頼まれたから、言はれたからする仕事ではなく、自分から進んでやりたくてやってきた、心からなる仕事でし

た。趣味？　道楽？　我が人生の半分を、清和会と共に過ごしてきた私です。心を込めた仕事に悔はありません。

×　×　×

題字「せいわ」は鳩山会長のお真筆です。表紙の色、見返しの色、写真の配置等々は、幹事有志に御相談してきめましたが、あとはすべて私の責任で致しました。

三十五周年記念祝賀会に出席下さった方々のグループ写真を全部のせまして、永く喜びの日の思い出に感謝の記念に致しました。御愛読御保存下さいますれば幸でございます。

翻刻者註

（1）塩原静の原稿、および、塩原しづか編集・発行、『清和会三十五年誌　せい和』、一九六七年、一一六頁には十一月五日（月）と記載されている。しかし、鳩山薫の日記には十三日とあり、また五日は箱根滞在中との記載もあるため、ここでは十三日と修正している。伊藤隆・季武嘉也編『鳩山一郎・薫日記』下巻鳩山薫篇、中央公論新社、二〇〇五年、三三二頁参照。

（2）この参議院議員選挙での全国区最多得票者は自由民主党所属の宮田輝、次いで無所属の市川房枝、無所属の青島幸男と続き、鳩山威一郎は約百五十万票で四位であった。なお、六年後の昭和五十五年の選挙では、市川、青島に続いて約二百万票の第三位となっている。

（3）麻真田とは、マニラ麻の繊維を真田に編んだ織物のことである。

（4）鳩山一郎は、昭和二十六年六月十一日に脳溢血で倒れ、追放解除の同年八月六日には療養中の身であった。